

2019年度移民政策学会冬季大会@長崎大学

「世界のウチナンチュ」を語りなおす

—— 沖縄における「二重の多文化共生」に向けた社会教育の取り組みから ——

Rethinking the History of “World Uchinanchu”:

from Social Education Initiatives toward “Double Multicultural Coexistence” in Okinawa

日本学術振興会特別研究員 PD (JSPS Research Fellow PD)

藤浪海 (FUJINAMI Kai)

キーワード：沖縄移民、民族的アイデンティティ、多文化共生

### (1)問題関心

「沖縄移民の歴史を学ぶことは、沖縄の多文化共生を考えることにつながると思ってる」——沖縄の高校で沖縄移民のワークショップを開いた帰りの車のなかで、その主催団体のスタッフが私につぶやいた言葉である。聞けばその団体は、沖縄のために行動した移民（「世界のウチナンチュ」）の歴史を沖縄社会のなかに広めていく社会教育事業を通して、①人々の沖縄アイデンティティの活性化のもとで沖縄と本土社会との不公正な関係を問い直すと同時に、②沖縄社会における外国人との共生を推進していこうとしているのだという。

発表者が当該団体の参与観察を行うなかで興味深かったのは、しかし、沖縄移民をテーマとしたこの社会教育事業の参加者から「ウチナンチュ、ウチナンチュっていけばいほど、外国人と相いれなくなってしまうのではないか」という懸念が提出されていたことである。たしかに沖縄アイデンティティの強調は、異なる出自をもつ人々にとっては排他的なものとなる可能性ももつ。当該団体は沖縄移民という存在をいかに語りなおすことによって、一見矛盾をはらんでいるようにも映るこの2つの目的を達成しようとしているのか。

移民政策や移民をめぐる取り組みというと、日本では留学生送り出し政策を除き、専ら入移民に対する施策が取り上げられがちであった。しかし歴史的に多くの移民を送り出してきた沖縄では、沖縄移民をめぐるさまざまな取り組みが実施されてきた。この「世界のウチナンチュ」をめぐる言説や取り組みについて新垣(2017)は、その成立の背景に沖縄と本土社会の不公正な関係性があることや、この言説に2つのベクトル、すなわち「小さな島の狭い社会での親密性を表現するベクトル」と「『世界』という外の世界へと開かれたベクトル」が内包されていることなど、興味深い指摘を行っている。ただしここで示されているのは、この言説の大枠にすぎない。この2つの方向性のもと沖縄移民をいかなる存在として解釈していくのかはそれぞれのアクターの立場やその時々々の社会情勢により異なっているはずである。

そこで本発表では、過去に起こった出来事を人々が現在どのように捉えそれに基づき今どのように行動しているのかに関心を寄せる歴史の社会学の視座から（浜、2005）、当該団体における沖縄移民をめぐる物語がいかに再構成されているのかを、沖縄社会全体をめぐるマクロ水準の変動と結びつけつつ検討していきたい。

### (2)沖縄アイデンティティの活性化——ナショナルな水準における多文化共生に向けて

まず、なぜ当該団体は沖縄移民をテーマとする社会教育事業を展開するようになったのだろうか。2002年から当該団体を支え続けその活動内容を大きく方向づけた現理事長の語りの検討から分かるのは、この取り組みが1990年代後半から盛り上がった米軍基地への反対運動の流れのなかで、沖縄の人々の自己決定権の回復を目指し立ち上がっていたということである。

この事業のなかでは、琉球処分以降の沖縄が貧困や戦災、占領に苦しむなかで移民が多く送り出されてきた

こと、そしてかれらが沖縄の直面する困難に対するさまざまな支援を行ってきた歴史が強調される。当該団体は、こうして沖縄移民を日本の植民地主義的支配に対する「抵抗主体」として提示することで、今沖縄に暮らす人々の沖縄アイデンティティを活性化させ、沖縄社会に対するその自己決定権を取り戻そうとしていたのである。この取り組みは、換言すれば、日本社会というナショナルな水準における沖縄の人々のマイノリティ性を沖縄の人々自身の力により乗り越えていこうとするアイデンティティ・ポリティクスとして位置づけられているといえよう。

### **(3)在沖外国人との共生の推進——ローカルな水準における多文化共生に向けて**

以上のように、当該団体は当初、ナショナルな水準における「多文化共生」に向け、この社会教育事業を展開していた。そのようななかで当該団体は2010年代前半におきた2つの地震（東日本大震災とネパール大地震）を契機として、当時増加し始めていた在沖外国人との共生をめぐる取り組みを積極的に展開するようになり、この社会教育事業にも在沖外国人との共生の推進という目的が付されるようになった。ではそのなかで、いかに沖縄移民に対する解釈のあり方は変容するようになったのだろうか。

「今外国人どんどんやってくるっていわれて、脅威だっていわれる」沖縄社会における状況に対しスタッフが語るのは、沖縄から離散していった「先輩」も現地で幅を利かせたかもしれないがそれでも移住先社会に受け入れてもらえたという歴史であり、「同胞」を受け入れてくれた移住先社会のあり方を広めていくことが大切だということである。さらに当該団体はこの物語の延長線上に、日本ヘデカセギ移住し苦闘する沖縄系南米人の姿をさらに接合することで、沖縄移民というテーマと在沖外国人との共生とをより明示的に結び付けようとしている。たとえば学習教材では、日本へのデカセギ移住者をテーマとした教材が収録され、日本社会における外国人労働者のおかれた状況の厳しさとそれを乗り越えていく沖縄移民の力強さ、単一のカテゴリーに収まりきれない移民の民族的アイデンティティのあり様を伝えている。こうして当該団体では、移住先社会のなかで受け入れてもらえた「同胞」として、そして日本社会のなかで苦闘する移住者として、沖縄移民を再解釈することで、在沖外国人との共生というローカルな水準における「多文化共生」を達成しようとしていたのである。

### **(4)結論**

以上本発表では、1990年代後半以降の米軍基地反対運動の盛り上がりとは2010年代以降の在沖外国人の増加という沖縄社会全体をめぐる変動のなかで、当該団体が沖縄移民に対して複数の解釈を示しながら、ナショナルな水準における本土社会との不公正な関係の変革とローカルな水準における在沖外国人との共生の推進という「二重の多文化共生」を同時に追求していることを明らかにしてきた。沖縄移民をめぐる施策に関する先行研究では「世界のウチナーンチュ」言説の大枠は示されてきたが、しかし社会情勢やアクターの立場の変化によってその具体的な物語は再構成されつづけている。今後地域や世代、ジェンダーなどの差異に着目しながら、そのほかの団体がそれぞれいかに物語を再構成しているのか検討していく必要がある。

### **<参考文献>**

- 新垣誠, 2017「グローバリゼーション、国民国家、そして『ホーム』としての沖縄—『世界のウチナーンチュ』という物語の可能性」沖縄キリスト教大学院大学編『沖縄キリスト教大学院大学論集』13号, 23～35頁
- 浜日出夫, 2005「歴史と記憶」長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』有斐閣, 171～199頁